

海外研修報告

～シンガポールにおける教育事情について～

明星大学教育学部教育学科 特任教授 高野良彦

はじめに

日本同様に狭い国土と資源の少ない国の一つがシンガポールである。そのシンガポールが世界的にも発展を遂げているのは、その地理的位置としての東西のハブ的存在からであることは、歴史的事実からも明らかである。

しかし、シンガポールの発展には、それ以上に教育が果たしてきた役割りがあると思っている。

それを是非、肌感覚で理解したいと考えて研修を行った。3週間の研修期間でもおに気づいたこと、感じたことを4項目に絞って次に述べる。



1 シンガポールの大学(ERC Institute)への訪問

(1) ビル1つがキャンパス

訪問した大学は、学生数8,000人のビジネスを中心とした小規模な私立の大学。現地コーディネーターには様々な校種の学校訪問を依頼していたが、スムーズに訪問することができたのは、シンガポールの中心地に位置するこの大学である。

国土の狭い国なので仕方のないことであるが、ビルの建物そのものが大学というもの。このような大学が他にもいくつかある。しかし、校外には広大な敷地のあるキャンパスを有する国立大学も、もちろんある。

(2) 創立2003年で15年の実績のある比較的若い大学

訪問先で、大学担当者が複数名で対応してくださり、ていねいに説明をしながら校舎内を隅々まで案内してくれる。大学全体に何となく活気のある雰囲気を感じる。



(3) グローバル化

大学の中を案内されてすぐに気づいたことが、シンガポールの学生だけでなく、他の国々からたくさんの留学生を受け入れていることである。グローバル化という言葉がごくごく自然に感じられる。学生の服装などから色々な国の留学生が在籍しているとすぐに気づく。

大学の質や学生の教育の質を向上させるにはこのようなグローバル化が果たす役割は大きいと思う。国土の狭いことと、人口も多くないことを上手に生かし、積極的に留学生を受け入れているということだった。

(4) 講義の工夫

実践、体験を重視したスキル学習を重視した講義を展開していると説明を受けた。学生が実に意欲的であるのには感心させられた。と同時に、日本の大学は(学生は)負けているとも思ってしまった。

講義をしている最中、案内されるままにすみずみまでを見学させていただいたが、講義中に誰一人として、いわゆる内職をしているような学生には出会わなかった。どの学生も意欲的に講義にそして実習に参加していた。学生のモチベーションが違うのだろうかとも感じたが。

(5) ハイテクを積極的に取り入れての講義等

これも驚きの一つであるが、様々なハイテク機器を講義の中で活用している様子を参観した。実際の企業等でも盛んに使用しているであろうようなハイテク機器を十二分に駆使している光景は、驚きでしかなかった。

このようなところにもシンガポールが現在でもなお世界の中で進んだ国の一つとして位置していることの理由があるように思える。教育の場においても先進的な取り組みをしている。

(6) 空きスペース等の有効活用

これは、大学経営の分野であろうと思うが、空きスペースを積極的に他の組織や団体に貸し出してビル自体を有効活用していると説明を受けた。

保育園への貸し出しもその例の一つである。保育園の活動のスペースを見学したが(大学を訪問した日には残念ながら保育園は休みの日であった。)、様々な人々が大学の中に入るにより自然と交流すなわちコミュニケーションが発生し、いい効果を生むのであろうと想像される。なかなか上手な経営の戦略であるように思う。

(7) 他大学との連携・協力

大学の戦略として世界中の他大学との連携・協力を積極的に展開している。この大学が世界中の大学と連携・協力関係の提携を結び、双方がメリットとなるような留学生の交換、教育での連携等進めていると紹介された。

世界中の大学ランキングが最近も報道されたが、シンガポール国立大学は常に上位にランクされているという実績がある。

残念ながら日本の大学では国立大学でも確か下位に甘んじているように思う。「教育に、垣根(国境)はない」ということを思わせられる説明であった。



2 公立小学校(Elementary School)のフィールドトリップ

(1) 異文化理解を教育施策の一つとして

シンガポールの公立学校を見学することは原則できないことを現地に行ってから知ることになった。というのも出発前の準備期間中に現地のコーディネーターからは「見学は可能ですから、ご心配なく」などと聞かされていたので安心して任せっぱなしにしていたが、現地に行ったら初めて聞かされて大変残念であった。

学校見学はできなかったが、幸いにも公立小学校のフィールドトリップの様子を観察できる機会が

あった。

シンガポールは様々な民族が共生している国家であり、その共生がうまく実現できている国としても知られていることは周知の事実である。このことの大きな理由に国を挙げての異文化理解教育が徹底されていることが、すぐにあげられよう。異文化理解教育が単なるスローガンで終わることなく日常の実践に生かしていることが立派でもある。このフィールドトリップがそのうちの一つである。

(2) 国認定のガイドによる実践

驚いたことは、この校外学習の異文化理解教育、すなわちフィールドトリップが国の教育施策の一環として実施され、しかも国がとても手厚い対応をしているという事実である。このことは、フィールドトリップを行っている時に実際にガイドさんから伺った話である。

日本でも校外学習と称して同様の取り組みを実践していると思うが、ここシンガポールではフィールドトリップに国の認定されたガイドを15人ずつのグループに一人を割り当てて、きめ細かく学習をしていることである。

学校行事であるから当然引率の教員はいたが、説明や指示などはほとんどをそのガイドが中心に学習を進めていた。役割分担がとてもはっきりしているようである

国としてどこにお金(税金)を投資するかをよく考えられているんだなあと感心させられた。

(3) アラブストリートのモスクの見学

シンガポールは共生の国であり、様々な民族が住んでいる。様々な民族が集まってそれぞれのコミュニティを構成している地域がある。

中華街、俗に言うチャイナタウンは観光でも有名であり、他にもアラブストリートと呼ばれる地域等様々にある。シンガポールの人口の大半は中華系が占めていて、アラブ系やインド系は少数である。アラブストリートにはいくつかのモスク(寺院)があり、毎日熱心な信者がお祈りをしている。その一つのモスクで小学生の集団が15人編成のグループに分かれて校外学習を行っていた。

小学生はユニホームを全員が着用していて半袖のシャツに男子は半ズボン、女子はスカートという服装であった。シンガポールの小学校や中学校はほとんどがユニホーム着用のようなのである。



(4) ワークシートを活用しての取り組み

15人の集団を小さくまとめてガイドが前に立ち、モスクについてその歴史、宗教のこと、宗教を背景にした文化について小学生に分かりやすい説明する。



小学生は、説明を聞きながら用意された校外学習用のワークブックに必要な応じてメモを取っている。

使用されているワークブックはどの小学校とも共通であることをガイドさんから伺った。ここにも国の大事な教育施策として異文化理解や共生という考えを確実に理解させたいという強い意志を感じる。

日本では各学校が創意工夫した学校ごとのワークシートや校外学習の資料集を使うのであるが、大きな違いである。

このことについては、どちらが良くてどちらが良くないとは言い切れない。どちらにも一長一短があるように思う。

(5) 大変手厚い対応

もちろん担任教師は引率している。

前にも述べたが、フィールドトリップにボランティアではなく国認定のガイドを配置していること。しかも15人という少人数に1人を配置するという大変手厚い対応にしていることに国がどれだけ異文化理解を大切にして教育施策として取り組んでいるかが伺える。「お見事」というしかない。

それにしても「教育は国家百年の計」と言いながらも、先進国の中で教育に占める予算が最下位である日本という国はこれから先大丈夫なのだろうかと思ってしまう。明確な共生、異文化理解のねらいのもとに実践が確実に成果を上げているように思える。国として手厚い対応をこれだけしていれば、効果が出ないわけではないと思えるほどである。ガイドさんもプライドを持って仕事をされているように見え、子どもたちも楽しみながらも良く取り組んでいるようにも見えた。

シンガポールの子どもの学力は世界的にみても常に上位に位置していることが十分にうなずける。教育の力で国力を高めていることが実感された。

3 3週間のホームステイ

(1) 校外の公営住宅に住む若い夫婦の家にホームステイ



その土地のことをよく知ろうとすれば、観光では表面上のことしか知ることができないので、もう少し詳しく生活や文化の様子を知りたいと思い、ホームステイをすることにした。そこに住んでいる人と生活を共にすることで知り得ることが多くあった。

私のホストは、ご主人が海軍に勤め、奥さんが病院勤務の子どものいないインド系の若夫婦であった。朝からヒンズー教のお祈りの声と香を焚く匂いでよく目が覚めたものである。食事もちろん宗教上の関係からか、肉食はなく、植物系のみで、手づかみでの食事である。15階建て公営アパートの10階が住居である。3LDKの夫婦で住むには十分すぎる広さであった。一緒に夕食をとる時に、あるいは食後の団らん時に色々な話をする機会が持てた。

(2) 鉄道網等の発達

公共交通手段である電車やバスは利便性が高く、比較的安い運賃で国民の足として利用度が高い。マナーも非常によい。

3週間の滞在中はずっと公共の電車を利用した。鉄道が交通網として非常に発達しており、庶民の足として使われている。

国土が狭いので、東西を鉄道で3時間ほど、南北にも同様に3時間ほどで行くことが可能で、一日あれば国中をぐりと回ることができる。しかも利用者のマナーもすこぶる良く、安全でもある。高齢者に座席を譲るという光景も電車の中で何度も目撃した。感心である。

私も滞在中はほとんどこの鉄道を利用していたが、高齢者に十分見えたのだろうか、何度か若い人から席を譲られることがあった。嬉しく感じながらも高齢者に思われたことに少々複雑な思いではあったが。

日本のようなスイカやパスモのような電磁カードが普及しており、長期に滞在する旅行者にとってと

でも便利であった。私も大いに活用させてもらった。

シンガポールの隣国へは4時間もすれば行くことが可能であり、わずか4時間足らずで外国である。全く異なる光景を見ることができる。発展著しいビルが林立するシンガポールからただ広く広がる田園風景と、道路も十分に舗装されているとはいいたいような光景。この落差はどうして生まれるのかと考えた時に一つの答えは教育の差ではなかろうかと思えてくる。

(3) 生活の実情

ホームステイ先のホストからいろいろな話を聴くことができた。その中で印象に残っていることの一つに、電気代の高さがあつた。それで、電気代ががとても高いので、エアコンやシャワーの時間などを制限するようにと何度か言われた。資源のない国の現実の一つである。

狭い国土でありながら、世界的に見ても先進国として発展している国ではあるが、様々なところで大変なことがあるようである。

(4) 高層アパートの林立

狭い国土であるので国民は一般的に公営の高層住宅に住んでいるようである。住宅施策についても国が計画的に取り組んでいる。

車窓から郊外に林立するカラフルでモダンなアパートと建物がとても美しく見える。計画された都市作りがまさに進行している。

また、意図的に同じ民族が同じアパートに固まることを避けるような手立てを講じており、中国系、インド系、アラブ系等、様々な人が同じアパートの棟に住んでいる。私のホストファミリーの隣りは、中華系の家族であつた。



アパートの敷地には、小さな公園やスポーツができるコートや遊具などがあつたり、数人が談笑したり、カードゲームができるようなスペースと机や椅子も設置されている。さらに大きな集会ができるスペースもあつた。滞在中にこのスペースで結婚パーティがにぎやかに開かれていた光景を目にすることができた。

ここにも国の共生社会に向けた明確なねらいがうまく機能しているように思える。

4 シンガポールでの語学学校のレッスン

(1) パソコンやiPadなどを活用しての授業展開

先ず驚いたことは、語学学校だけれども、授業には常に検索機能を持っている携帯やiPadを使っての学習であつたことである。それで、スマホやiPadを持っていないと授業に参加できないのだ。語学学校といえどもここまで教育機器の活用は進んでいるのかと目を見張るものがあつた。

(2) フィールドトリップのレッスン

単なる教室での語学の学習だけでなく、近隣に点在する博物館、資料館の見学をレッスンの中に組み入れ、課題を事前に提示して見学後に課題について話し合いをして理解を深めるなど、受け手である生徒が主体的に学ぶ手立てを積極的に進めている。

カリキュラムをみると、教室でのレッスンの他にもこのような特別なレッスンが設定され、受講者に

飽きさせない工夫が至るところにあった。

これなどは、次期学習指導要領の目玉の一である、いわゆるアクティブラーニングにつながるものと思われた。

5 おわりに

この報告書を作成中に小さな困み記事が目にとまった。

シンガポールの青年が現政権に批判的な書き込みをインターネットにしたために拘留されてしまった。拘留が解かれた後にこの青年は人権侵害を米国に訴え、認められて亡命することができたと言う内容。

シンガポールに滞在中に企業から派遣されて語学研修している人たちと知り合いになった。その中の一人が、「シンガポールは明るい北朝鮮と言われてる。」と言った言葉を思い出した。

シンガポールから様々なことを気づかされ、学ぶことが多くあり、私にとって収穫の多い研修であった。しかし、まだまだシンガポールには別の様々な顔があるようである。まだまだ興味は尽きそうにない。

以上、研修で感じたこと、学んだことを中心に報告させていただいた。これ以外にも長期間にわたって生活したからこそ発見したこと、気づいたことなどがたくさんあり、是非今後の講義に生かしていきたいと考える。

「百聞は一見にしかず」とはよく言ったもので、実際に行って、見て、様々な感じることができ、有意義な研修の機会となった。

最後にこのような研修の機会を認めていただいたことに感謝して、報告とします。